

Snowman



70 回生学年主任 **丹生 憲一**

26 日（木）には「基礎学力テスト」を受験しました。課題考査、進研模試に続き、先週末には昨年のセンター試験の問題も配られ、あっという間に 3 年生 0 学期という雰囲気になってきました。まるで 2 週間前の大雪のように、試験一色に埋め尽くした感じです…。身動きが取れなくなっている人もいるかもしれません…。雪のように白紙で出したり、白旗をあげたりしていないことを祈ります。明日から 2 月。

<2 月の行事予定>

（カ）はスクールカウンセラー来校日

日	月	火	水	木	金	土
	30	31	1 (カ)	2	3 	4
5	6 	7 校内長距離走大会	8 (カ)	9 注意! 火曜日の時間割 + ⑦LHR	10 進研模試①	11 国際問題を考える日 (1 組)
12 注意! 進研模試②	13 金海外国語学校 来校 (午前中)	14 	15 推薦入試 *登校禁止	16 人権 HR	17 *考査一週間前	18
19	20	21	22 (カ)	23	24 学年末考査① (3 月 3 日まで)	25
26 	27 学年末考査② 卒業式予行	28 卒業式	<p>《予告》3 月 12 日（日）が学力検査のため、3 月 11 日（土）に登校、10 日（金）が代休になります。（13 日～15 日休業）</p>			

<文化住宅の奇跡> 震災を忘れない…。第三弾。

私の住んでいた住宅は築 25 年の古い文化住宅で、激震によって一階部分が倒壊しました。しかし幸運にも屋根は瓦でなくスレート葺きだったため、屋根から崩れ落ちることはありませんでした。すぐ隣のアパートは、屋根瓦が覆いかぶさるように崩れ落ちて、近所の人たちや駆けつけた親族が、一枚一枚はぎとるように屋根を取り除いておられました。残念ながら全員亡くなりました。

私たちの住宅は 4 世帯（1 階に 2 世帯、2 階に 2 世帯）が入っていて、2 階には私たち夫婦と、年配の女性 0 さんが一人で入居しており、階下には一人暮らしの男性 M さん、もう一方には、姉弟二人が住んでいました。揺れが収まったあと、私たちが外に這い出ると、反対側の窓から 0 さんもぶるぶる震えながら出てこられました。

ところが姉弟の住んでいる部屋から「助けて～！誰か助けてー！」と女性の悲鳴が聞こえます。一階部分がつぶれてしまった住宅は、外から屋内がどうなっているのか全くわかりませんでした。

「大丈夫ですか？怪我はないですか？！」

「なんとか大丈夫です！でも真っ暗で何も見えません！」

「助けを呼ぶので、がんばってください！」

私たち 3 人で声をかけていると、弟が駆けつけてきました。姉弟のご両親が近くのマンションに住んでおられ、その夜は、たまたま弟だけ両親のマンションにいたそうです。

「お姉ちゃん！助けてやるからな！！…大丈夫か？」

「うん、足が挟まって動けへんけど大丈夫や！早よ出して！」

弟君は公衆電話から消防署に電話しに行きましたが、この時点で電話は不通…自転車で10分ほどのところに消防署があり、「直接行く」と飛び出していきました。

その間、時々「だいじょうぶですか？」「寒くないですか」と時々声をかけながら、明るくなるのを待っていました。

「あかん！消防署、誰もおらへん！」

弟は半べそをかいてもどってきました。自分たちでなんとかするしかありません。

弟と私の2人で、近所の自動車整備工場からバールをとってきて、モルタル壁を叩き壊し始めました。壁はあっというまに破られ、木の枠組みが見えてきます。

「楽勝や！」

しかし、文字通り壁にぶちあたりました。私たちが掘りはじめた所は台所のシンクで、ステンレスの壁にあたってしまったのです。場所を5メートルほど横に移して掘ると、今度は大きな柱が斜めに倒れていました。また数メートル外す…とようやく30～50センチ四方の穴がぽっかりと開きました。…でも、中の様子は見えません。

懐中電灯を大家さんが持ってきてくれました。姉から光が見えるという声が…

「姉ちゃん、這ってこい！」

弟に声をかけられて、お姉ちゃんが（おそらく）上半身だけをひねってこちらに向かい始めます。でも、最初に言っていたように足を挟まれて動けないようです。

「あかん！自分では動けへん…」

「よし！俺が行ってやる」

弟はその小さな穴から肩をつっこんでもぐりこんでいきました。

…というとは簡単ですが、バールでこじ開けた穴はたたき割られた木の板がむき出しで、ギザギザのベニヤ板の間を這って行くのです…

「姉ちゃんの手をつかみました～！」

中からこっちに声がかかりました。

「僕の足を引っ張ってください！」

私は弟の足首をつかむと、大きなカブを引っこ抜くような感じで彼の足を引っ張りました。

中からは姉の悲鳴が聞こえます！

「あかん！やめて！肩が抜ける！手首が！！」

その声に一瞬ひるんで力を抜いた私に弟が、

「引っ張ってください！！…姉ちゃん！肩なんか抜けても死なへん！」

「ギャ～！！」

こうして、私たちはこの姉をひっぱり出したのです。弟の着ていたジャンパーはズタズタに裂け、姉はパジャマのまま、引っかき傷で血だらけでしたが、大きな怪我はなく助かりました。綱引きに勝ったときのような爽快感とともに、私の人命救助が終わりました。後から聞くと、姉はたまたまコタツで寝ていて助かったそうです。布団で寝ていれば、間違いなく天井が落ちてきて命はなかったことでしょう。ここでも、二つの「たまたま」が2人の命を救いました。

…ほっとして、私たちが思い出したのは階下に住むMさんのことでした。Mさんは自転車で尼崎の工場に通勤されていましたが、この日は倒れた壁の下に自転車が潰れていました。



（続く）